徳山大学OSP（B）2012年度実施報告

Execution Report of OSP（B）2012 in Tokuyama University

紙矢健治・岡野啓介・楊政樺・周伝久・王穎駿

1. はじめに

1.1 実施概要

今年度からキャリア教育系に属する両学部共通の選択科目（2単位）に認定された海外研修プログラムOSP（B）は、本学との交流協定校・台湾国立高雄餐旅大学の支援のもと、2012年8月25日から31日までの一週間をかけ、台湾・高雄市を舞台として実施された。「本学のEQ教育の中核である『つながる力』の育成」を目的とし、「あえて言葉の通じにくい海外の環境において、いかに相手の意思を洞察し、コミュニケーションを図るか」をテーマとした。

今回のプログラムを組むうえで基礎となったのが、昨年度（2011年度）試験的に実施した福祉情報学部学生向けの「海外体験プログラム」である。そこでは、(1) 台南市YMCA社福基金会老人照顧服務中心（老人施設）、(2) 社団法人高雄県脊髄損傷者協会「髄喜家園」、(3) 伊甸社会福利基金会　鳳山早期療育センター（障害児早期養育施設）、の3か所を選定し、各々の施設において1日ずつ研修を行った。これに対し今年度（2012年度）は、OSP（B）が両学部の共通科目として認定されたことを受け、台湾のハンセン病救済協会、18歳以上の成人の障害者が利用するデイサービス施設、特別支援学校及び薬物中毒者更生施設などの福祉関連施設に加え、テレビ局やメディア施設及びシネマコンプレックスなどを研修施設として選定する企画を立てた。

研修を依頼する施設・教育機関については、2012年3月、学長（岡野）と筆者（紙矢）が共に交流協定校である台湾国立高雄餐旅大学を表敬訪問した際、高雄市立高雄啓智学校、文化省衛武営芸術文化センター、財団法人中華民国台湾基督教信義会（財団法人台湾ハンセン病救済協会や財団法人沐恩之

家など運営）に出向き、視察・協議のうえ直接協力を要請し、承諾を得たものである（写真1から写真6を参照）。その後、詳細な研修内容及び実施する期日・対応方法などについて、科目担当者・紙矢がネット経由で現地サイドとの協議を続け、今回の実施に至ることができた。

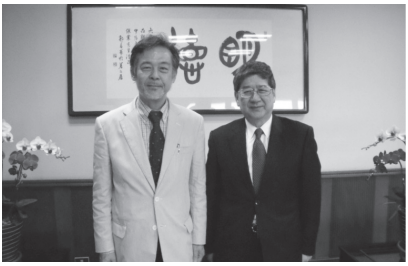

写真1：国立高雄餐旅大学校長容継業教授と交流協定の詳細について協議

写真2：文化省衛武営芸術文化中心代理主任（当時）朱俊徳氏と交流について協議

写真3：衛武営芸術文化中心建設現場を視察

写真4：財団法人中華民国台湾基督教信義会を訪問（左から高英茂主任牧師、長老）

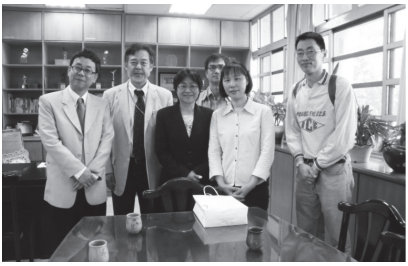

写真5：高雄市立高雄啓智学校黄国書校長（右3）を表敬訪問

写真6：高雄啓智学校小学6年生部の児童と（写真掲示許諾済）

1.2　第2回OSP（B）について

今年度OSP（B）を選択し、研修に参加した学生は、経済学部3名・福祉情報学部1名の計4名であった。引率は科目担当者である教員・紙矢が行った。本稿では、「大学間交流」、「メディア施設における研修」、「特別支援学校及び福祉施設での研修」という3点に分け、研修内容を簡単に紹介していく。研修日程については表1を参照いただきたい。

表1　第2回OSP（B）実施日程及び内容

日	内　　容
25日（土）	徳山発06：34発　こだま821号乗車（新山口発06：49発） 博多着07：38着　タクシーで福岡空港国際線ターミナルへ移動 福岡空港国際線ターミナル　中華航空カウンターチェックイン後、出国手続き　ＣＩ111　10：10発 台北桃園国際機場（空港第2ターミナル）到着11：25（現地時間） □入国手続き □日本円を台湾元に両替 空港バス（統聯客運）705路で台湾高速鉄路桃園站（駅）へ（料金30元） 所要：約20分 台湾高速鉄路で高雄へ（料金1330元）　5：00　高雄左営駅に到着 ホームステイ　高雄餐旅大学交換留学生宅に滞在
26日（日）	受け入れ先にて滞在、高雄餐旅大学学生寮入寮。
27日（月）	午前9時　国立高雄餐旅大学 ※容継業校長が北京出張のため、潘江東副学長を表敬訪問 午前11：00　航空サービス管理系（人文大楼2F） 航空暨運輸服務管理系の設備を参観、王穎駿助理教授（組長）による「ホスピタリティ講座」（航空機操縦シミュレーション研修）を実施
	15：00　高雄市影戯劇商業同業公会 理事長　陳文武先生（前、中華民国電影戯劇商業同業公会理事長）を表敬訪問。高雄市内のオスカー3Dデジタルシアターを参観。特に「金馬奨」のことについて、主催者としての経験を聞く。 夕方、高雄市影戯劇商業同業公会側主催の晩餐 （高雄餐旅大学学生寮泊）
28日（火）	10：00　国立中山大学中国與アジア太平洋区域研究所顧長永所長を訪問 ※台風14号接近のため、予定されていた財団法人台湾ハンセン病救済協会での研修の中止要請がきたため、急きょ差し替えて実施。
	14：00　財団法人心路社会福利基金会を訪問 終了後、高雄市内を観光
29日（水）	10：00　FTV民間全民電視公司（テレビ局） 同社25階ニューススタジオにおいてニュース番組の制作実習
	14：00　PTS台湾公共電視（テレビ）南部多機能スタジオ 周伝久氏によるジャーナリズム研修

日	内　　容
30日（木）	10：00　高雄市立高雄啓智学校訪問 高等部実習大楼、小学部6年生（甲班）など
	13：30　行政院文化部衛武営芸術文化中心訪問 朱俊徳副主任が対応
	15：00　財団法人屏東県私立基督教沐恩之家が運営する薬物中毒者更生施設 中華民国台湾基督教信義会十全教会の高英茂牧師らが同行
31日（金）	高雄左営駅発　午前08：36　桃園駅着　10：18 桃園駅内チェックインカウンターでチェックイン 空港バスで桃園国際空港第2ターミナルへ。 出国手続き後、ＣＩ116便　12：00に搭乗、福岡空港15：10到着 タクシーまたは空港バスで博多駅へ

研修への参加学生に対しては、大学が（教務部・OSP関連予算から）旅費交通費及び保険代金を負担した。その結果、学生は台湾での移動費と食費、高雄餐旅大学学生寮の宿泊費5泊分（1000元＝2700円）を負担することとなったが、私的支弁を除けば、全行程にかかった費用は一人あたり3万円を超えなかった。

なお、当初の計画にあった財団法人台湾ハンセン病救済協会での研修は、台風14号の接近によって、同協会から中止要請を受け、急遽、国立中山大学中国與アジア太平洋研究科訪問に変更せざるを得なかったを記しておく。また、同研究科所長（学科長）の顧長永教授には、急な訪問に対応していただいたことを特記し、ここに謝意を表しておきたい。

2. 大学間交流

当初の計画では、大学間交流の研修先としては、国立高雄餐旅大学のみを予定していた。しかし、前述の事情（台風14号の接近によるハンセン病救済協会での研修キャンセル）により、急遽、国立中山大学社会科学院訪問が加わり、大学間交流は2校となった。

2.1　国立高雄餐旅大学

国立高雄餐旅大学は徳山大学の交流提携校である。2011年度に協定が成立

し、それ以来交流が盛んに行われている。昨年の研修にあたっては、国立高雄餐旅大学にホテルサービス・教育・福祉の3分野でのホスピタリティー講座を企画・実施していただいた[1)]。

今年度は、航空暨運輸服務管理系[2)]の協力を得て王穎駿教授による航空機操縦の体験を実施した。高雄餐旅大学は教育部技術及職業教育司所管の職業大学であり、国立台湾大学や台湾師範大学、中興大学、成功大学、中山大学などの研究重点型の学術系大学とは異なり、実務優先の技術学院（科技大学）に分類される。有力な技術学院としては、国立台湾科技大学、国立台北科技大学、雲林科技大学などがあるがホスピタリティ専門の大学としては国際的な評価が高い。

今回は同学科の全面的な協力により、王穎駿助理教授による「ホスピタリティ講座」（航空機操縦シミュレーション研修）を行うことができた。高雄餐旅大学との大学間交流については、写真7から写真10までを参照されたい。

写真7：高雄餐旅大学副学長潘江東先生を表敬訪問

写真8：航空暨運輸服務管理系航空機操縦シミュレーション教室（右3が王穎駿助理教授）

1）2011年度は国立高雄餐旅大学第3教学ビル5階応用英語系会議室において、9月22日に実施した。その内容は、ホスピタリティ講座(1)『台湾のホスピタリティ教育について」応用日語系、黄招憲教授、ホスピタリティ講座(2)「ホテルサービスと福祉」ホテルマネージメント系、謝金龍講師、ホスピタリティ講座(3)「台湾の高齢者福祉の現状」高雄市政府衛生局督導、劉雲芝氏である。詳しくは、紙矢健治「海外就業体験プログラム台湾（2011）実施報告」『徳山大学論叢』（第73号）、2012年1月、p207-216を参照されたい。

2）運輸與休閒服務企画学程（修士課程）も併設。

写真9：「ホスピタリティ講座」航空機シミュレーション実習（左、大窪君）

写真10：同実習（福祉情報学部　大嶋君）

2.2　国立中山大学

高雄市蓮海路70号に位置する国立の総合大学であり、国立高雄餐旅大学とは異なり、教育部高等教育司所管の学術系大学である。世界大学ランキングでは、ザ・タイムス・ハイヤー・エデュケーション（The Times Higher Education Supplement）の「Times Higher Education's list of the world's top universities for 2011-2012」の評価で251-275位[3)]、Academic Ranking of World Universities – 2012のランキング479位、台湾国内ランキングは8位である。経営学（中国語では企業管理）では、台湾国内のトップクラスにある。

今回は、社会科学院中国與アジア太平洋区域研究所において、顧長永所長より、おもに台湾・中国・日本などの国際関係の話題を分かりやすくお話しいいただいた。参加者に対し、海外留学に関心をもってもらうため、とりわけ大学卒業後の大学院進学についても詳しく紹介していただいた。同研究科には修士課程及び博士課程があり、英語と中国語による講義が行われている。英語による授業ができることを前提としているため、ほぼ全教員がアメリカを中心とする英語圏の課程博士学位を持つ[4)]。社会科学分野である政治学・経済学、社会学の3分野において、中国とアジア太平洋地域の研究が行われている（写真11、12を参照）。

3）同レベル（251-275）には、香港理工大学や九州大学、南京大学などの有力大学がランクインし、日本の有力大学では東京大学が40位、京都大学が52位であった。

写真11：国立中山大学社会科学院中国與アジア太平洋研究所所長の顧永長教授（写真中央）

写真12：同学中庭にて（孫文、蔣介石像前）

3. メディア研修

当初、公共放送（PTS）及び中華電視（CTS）での研修を計画していたが、この２局が共に台湾公広集団（TBSグループ）のテレビ局で部分的に局舎も共有するため、中華電視公司新聞部の項賓和氏の紹介により、中華電視（CTS）での研修を別系列の民間全民電視公司（FTV）での研修に切り替えることができた。FTVでは、同社ニューススタジオを使用し、ニュース制作の実習を行い、研修学生にはキャスター役とリポーター役をつとめさせた。中国語と英語で指示が出る中、参加者は洞察力を最大限発揮し、ニュース番組の形をつくりあげることができた。ニュース報道やマスコミの現場における仕事に対する関心を高めることができたものと考える。

3.1　FTV民間全民電視公司

民間全民電視公司は、高雄市三民区博愛一路366号に本社を置く地上波である。民視無線チャンネルと民視ニュースチャンネル、民視HDチャンネルなど複数のチャンネルを持つ。台北市の社屋が事実上の拠点であるが、2015

4）中華民国（台湾）教育部の規定では、いわゆる論文博士は承認されず、「参考名単」認可大学リストにある大学の修士・博士課程の学位とともに、留学先の国家での滞在証明と授業への出席記録、成績表などの確認作業を経て、教員への登用が国家資格において行われる。

年度に台北市に隣接する新北市（行政院直轄市）林口区に大規模社屋を建設し、本社を同所に移転させる予定である。TTV台湾電視公司、CTS中華電視公司（1971年10月放送開始）、CTV中国電視公司が、それぞれ台湾省政府、国防省、中国国民党による経営であり、純粋な民間地上波放送としては、台湾のテレビ史上初のテレビ局である。

研修では同社南部中心製作組資深工程師、張重毅氏等の指導により、ニュース原稿がテレビカメラに直接流れる様子を直接体験することができ、とくに欧米や台湾でどのようにニュースが放送されているのかが、よく理解できた。

学生は、キャスター役とリポーター役の学生のやりとりなども体験でき、一般的なインターンシップと比べても、大変質の濃い内容となったと思う。詳しくは写真13から15までを参照されたい。

写真13：FTVスタジオでのニュース番組制作研修（キャスター役の原田さん）

写真14：クロマキーを使った合成画面の制作研修

写真15：中継リポート体験（橋本君）

写真16：民間全民電視股份有限公司南部中心執行主任、黄揚俊氏、ディレクターとの記念撮影

3.2　PTS台湾公共放送

2006年に放送を開始したPTS台湾公共放送は、台湾公広集団に属する公共放送である。国防省経営からスタートした中華電視公司とその後設立された客家電視公司、原住民電視公司、海外向けの台湾宏観電視公司とともにTBS台湾公広集団を形成する中核メディアとして、国内外において高い評価を得ている。

同局では、本論の著者でもあり著名なドキュメンタリー制作者である周伝久氏[5]より、台湾のテレビ放送についてのゼミ授業が行われ、特に参加者から台湾のテレビ放送の自由度などについて熱心な質問が出るなど、充実した内容となった。最近は北欧各国の老人・障害者福祉についてのドキュメンタ

写真17：PTS台湾公共放送南部多機能スタジオ（左1が橋本君、左2が原田さん）

写真18：「マスコミ講座」PTS台湾公共放送周伝久氏（中央）、カメラマンの鄭仲宏氏（右1）

写真19：記念撮影（左3が周伝久、左2がカメラマンの鄭仲宏氏）

写真20：PTS台湾公共放送社内参観

5）台湾のジャーナリスト最高賞の「2007卓越新聞報導奬」や「2009曾虚白先生公共服務報導奬」の受賞がある。

リー番組を断続的に制作し放送している同氏であるが、2011年3月には本学や周南市を取材し、周南市に関する番組を2度放送している。

3.3　文化省衛武営芸術文化センター

行政院（内閣）文化部（省）は、日本の文化庁に相当する省庁であり、今年5月に文化建設委員会（略称、文建会）が格上げされ、部（省）となった。同センターは現在建設中であるが、2014年度に正式に運用が開始され、アジア最大級のメディアセンターが誕生する。3月末の学長（岡野）の訪問（写真2、3を参照）を契機に、本学のもつ映画や漫画・アニメなどの分野での、同センターとの交流を促進できればと考えている。

今回の研修では、朱俊徳副主任によるブリーフィングが行われ、建設中の施設に入り、メディアセンター建設のプロセスを見ることができた（写真21、22を参照）。

写真21：内閣文化省衛武営芸術文化中心建設現場　朱俊徳副主任（左4）

写真22：同センター事務所棟でのブリーフィング

3.4　奥斯卡3D数位影城（オスカー 3Dデジタルシアター）

奥斯卡3D数位影城は、高雄市の老舗のシネマコンプレックスであり、11の劇場を有する。経営者は陳文武氏である。同氏は、立栄航空の前身である馬公航空公司を1988年に設立し、1995年にエバー航空に譲渡するまで足かけ8年間経営を続けた。中華民国電影事業発展基金会が主催する台湾版アカ

写真23：陳文武理事長（前列中央）主催の晩餐での記念撮影

写真24：オスカー3Dデジタルシアタービル内での記念撮影

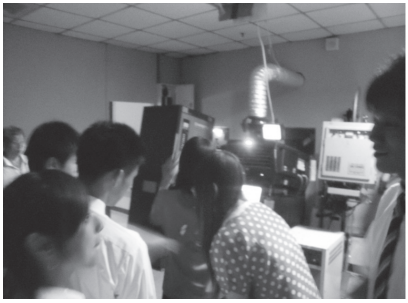

写真25：映写室内の参観

写真26：映写室から見た客席の様子

デミー賞「金馬奨」の運営にかかわり、中華民国電影同業理事長として映画の振興にも大きな貢献をした。その後は、国美有線電視の経営も行った。同社では、映画の上映設備、映画館の営業の様子などを見学した。同社シネマコンプレックスにおける研修、滞在時間は2時間であったが、地元の人びとが集う複合映画施設を直接裏側から見ることができ、また同社からは、映画専門の教員との交流について要請があり、今後の研修実施のチャンネルがまた一つ増えた（詳しくは写真23から写真26を参照）。

4. 特別支援学校及び福祉施設

2011年度の研修受け入れ機関が、老人福祉と脊髄損傷者施設、障害児早期療養施設であったので、今回は重複がないように配慮し、高雄市立高雄啓智

学校（特別支援学校）と財団法人心路社会福利基金会施設（18歳以上の成人障害者のためのデイケア施設）、財団法人屏東県基督教私立沐恩之家施設（薬物中毒者のための更生施設）における研修内容を準備した。

4.1　高雄市立高雄啓智学校

高雄市立高雄啓智学校は、日本の特別支援学校に相当する教育機関であり、高雄市政府教育局の所管である。高雄市三民区憲政路にある。学校長は黄国書氏である。同校は、小学部、中学部及び高等部からなり、市内の特別支援学校としては最大級の規模である。

同校では、陳啓森教務主任（教頭級）の案内により、高等部職能実習施設と小学部6年生の授業を、約2時間、参観した。とりわけ言葉のできない児童・生徒がコミュニケーションカードを使用し、わずかではあるが、意思を伝えることができるようになるなど、画期的、実験的な取り組みを行っている点が注目されている。同校には、3月末に学長（岡野）が訪問し、継続的な交流を要請し、今回の研修につなげることができた。

学長（岡野）が訪問した際の様子は、PTS台湾公共放送「独立特派員」（2012年6月13日22時放送）で取り上げられている（研修の様子は写真27、28を参照されたい）。

写真27：高雄市立高雄啓智学校小学部6年生のクラス（右1が黄国書校長）

写真28：陳啓森教務主任による高等部実習棟研修

4.2　財団法人心路社会福利基金会

財団法人心路社会福利基金会は、とくに障害を持つ18歳以上の成年のデイサービスの通所施設として実績がある。同施設での研修は、介護する側が入所者一人ひとりの特徴を徹底して理解するしくみ（写真30）がテーマとして取り上げられ、福祉情報学部の学生だけでなく、経済学部の学生も熱心に質問をしていた。献身的に入所者に尽くす姿勢は、日本の福祉施設にも大いに紹介したいところである。

写真29：財団法人心路基金会18-49歳成人までの入所施設）

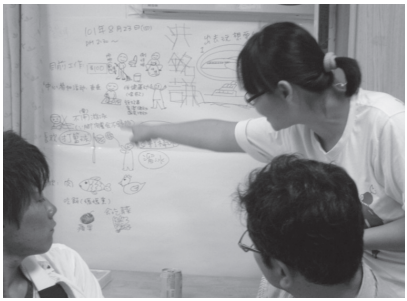

写真30：同基金会でのケーススタディー

4.3　財団法人屏東県私立基督教沐恩之家

財団法人屏東県私立基督教沐恩之家が運営する薬物中毒者更生施設は、屏東県内埔郷に位置する。社会福祉施設の範疇に入るものでは、本来はその性質上見学や立ち入りは許されないのは言うまでもないが、学長（岡野）が、この施設を運営する財団法人を訪問して協力を要請し、（写真4）今回実現の運びとなった。研修当日は、財団法人中華民国台湾基督教信義会の協力を得て、十全教会主任牧師の高英茂氏の同行により、実施された。同施設は、主にヘロインの中毒者の更生施設であるので、入所者の様子を見た後、本学研修生と主任・指導員との対談形式での実施となった。入所者（20名）の様子を撮影することは固く禁じられたため、本稿では紹介できないので、その点、あらかじめ諒承されたい。

入所期間はおおむね1年半である。入所後1か月半は、1人の入所者に指導

員と牧師がそれぞれ1人ずつ付く。この期間が最も困難であるとされ、入所者には、薬物中毒を克服するための薬剤は使用せず、キリスト教の教えによって克服する。おどろくことに、同施設はきわめて開放的であり、施錠もない。

参加者は、薬物の恐ろしさや中毒になってからの苦しさなどについても良く理解したようであった。また、薬物中毒後、更生するプロセスにおける感覚について、「熱く熱した大きな鍋の中に入れられた蟻のような心境であり、幻覚や幻聴にもさいなまれ、それは苦しいものであった」と語る更生者もいる。投薬ではなく信仰の力で克服を促す指導員の献身的な態度に心を動かされた入所者が多いという点が、学生たちの心を動かしたようであった（写真31から34を参照されたい）。

写真31：参加者全員と高英茂主任牧師（左3）と同施設主任（右4）、指導員（左5）

写真32：入所者が作成した工芸品

写真33：同施設の理念、教え

写真34：同施設主任（左1）、指導員（中央）

おわりに

OSP（B）は、本学と台湾における研修受け入れ大学及びメディア・福祉施設の緊密な連携のもとに、共同して実施されたものである。海外におけるこのように多くの研修先を短期間かつ断続的に訪問をすることは、相当難しい。しかし、2011年度の試験的実施に引き続き、一層充実した内容とできたことは、大変喜ばしい限りである。こうした言葉の通じない環境の中での研修を通じて、通常では経験できない現場の実務を学生に体験させることこそ、OSPの醍醐味であると実感する。なお、本来は論考に仕上げる予定であったが、時間と紙幅の関係でかような報告になった。4名の参加学生の今後の学習、職業選択のプロセスにおいて、本研修の内容が意義を持つことを期待したい。最後に各方面の熱意と厚意に感謝しつつ稿をおわりたい。

関連ホームページアドレス

The Times Higher Education Supplement
http://www.timeshighereducation.co.uk/world-university-rankings/
上海交通大学（CWCU）
http://www.shanghairanking.com/index.html
国立高雄餐旅大学
http://www.nkuht.edu.tw/
航空暨運輸服務管理系
http://tlm.nkuht.edu.tw/main.php
運輸與休閒服務企画碩士学位学程
http://tlm.nkuht.edu.tw/main.php
国立中山大学
ttp://www.nsysu.edu.tw/
国立中山大学中国與アジア太平洋研究科
ttp://icaps.nsysu.edu.tw/bin/home.php
FTV民間全民電視公司
ttp://www.ftv.com.tw/index.aspx
PTS台湾公共放送
ttp://www.pts.org.tw/
TBS台湾公広集団
ttp://www.tbs.org.tw/
文化部衛武営芸術文化中心
ttp://www.wac.gov.tw/
奥斯卡3D数位影城（オスカー 3Dデジタルシアター）
ttp://www.cannes.com.tw/thisweek.htm

高雄市立高雄啓智学校
　ttp://www.kmsmr.kh.edu.tw/
財団法人心路社会福利基金会
　ttp://web.syinlu.org.tw/
財団法人屏東県私立基督教沐恩之家
　ttp://www.hg.org.tw/

著　者

紙矢健治（徳山大学経済学部教授）
岡野啓介（徳山大学学長）
楊政樺（国立高雄餐旅大学航空暨運輸服務管理系副教授兼主任兼運輸與休閒服務企画学程主任）
周伝久（台湾公共電視制作人・記者、国立高雄師範大学教育学博士）
王穎駿（国立高雄餐旅大学航空暨運輸服務管理系助理教授）